

カントに於ける必然的存在者の概念の研究(三)

草野 章

『純粹理性批判』に於いて必然的存在者の概念が中心的に扱われる箇所は、言うまでもなく超越論的弁証論第二篇第三章「純粹理性の理想」である。恐らくこの箇所はカント以前の伝統的形而上学、前批判期カントの形而上学（特に『神の現存在の唯一可能な証明根拠』に於ける形而上学）及びカントが『純粹理性批判』を以て切り開いた批判哲学に基づく新たな「形而上学」が緊密に関連している部分であつて、極めて意味深い故にまた興味深くもあるが、様々な契機が緋い交ぜになっているために理解を極めて困難ならしめている箇所でもある。カントがここに於いて主張せんとしたことは一体何であつたのかを探ろうとするのが筆者の当面の目標である。一般には伝統的形而上学に基づく在来の神の存在証明の無効が宣せられていと理解されているようであるが、果たしてそれだけに留まるものなのかどうかは頗る疑問の余地があるように思われる。如何なる哲学的・神学的問題がここに展開されているのか、そしてそれは如何なる哲学史的・思想史的問題を孕んでいるのか——この問

題に関して解答を与える作業は、先ずカントの主張を出来るだけ忠実に抽出するという前提作業を要求する。本稿はこの前提作業の一部に関わるものである。

一

『純粹理性批判』に於いて必然的存在者の概念が扱われる箇所は、「純粹理性の理想」以外に実はもう一箇所ある。それは超越論的弁証論第二編第二章「純粹理性のアンチノミー」に於いて論ぜられる四つのアンチノミーの内の最後のもの、即ち第四アンチノミーである。必然的存在者の概念が中心的に論ぜられる「純粹理性の理想」よりも「純粹理性のアンチノミー」の方が先に考究されているという『純粹理性批判』の体系構成上の観点からしても、両箇所に関ける「必然的存在者」の概念の比較検討を経ずしては『純粹理性批判』全体に於ける「必然的存在者」の概念の最終的確定が不可能になることが予想されるが故に、先ずは第四アンチノミーに於ける

「必然的存在者」の概念が如何なるものであるかを把握すべきであろう。第四アンチノミーを理解せずしては「純粹理性の理想」も理解することはできないという指摘もあるのである。¹⁾

カントは第四アンチノミーと「純粹理性の理想」に於ける必然的存在者の概念に関する考察の仕方 of 相違を、第四アンチノミーの定立に対する註の所で以下の如く述べている。

「必然的存在者が現実存在することを証明するためには、私はここで宇宙論的論証以外の論証を用いてはならないのである。すなわち現象に於ける被制約者から概念に於ける無制約者へと上昇して行くのであるが、その際この無制約者を系列の絶対的総体の必然的制約と見なすのである。あらゆる存在者一般の中の最高存在者という純粹な(Blog)理念に基づく証明を試みることは、理性の別の原理に属することであるから、斯かる証明は別個に生ぜざるを得ないのである。」²⁾

また反定立に対する註の所で以下の如く述べている。

「現象の系列を上昇する際に、端的に必然的な最高原因の現存在に對立する諸困難に遭遇すると誤信する場合、これらの諸困難はものの必然的現存在一般という純粹な概念に基づいてはならず、従つて存在論的であつてはならない。そうではなくて、それらは現象の系列にそれ自体無制約的なひとつの制約を想定するために、現象の系列との因果的結合から發現せねばならぬのであり、従つて宇宙論的であり且つ経験的法則に従つて推論されねばならないものである。即ち、(感性界に於ける)諸原因の系列の上昇が経験的に無制約的な制約の所で終了することは全く不可能であり、また世

界状態の偶然性に基づく宇宙論的論証は、世界状態が変化することからして、系列を先ず第一に起始する原因を想定することに反するということが示されねばならないのである。」³⁾

ここには明確に「純粹理性の理想」に於ける必然的存在者の概念と第四アンチノミーに於けるそれとの相違が述べられている。第四アンチノミーに於ける必然的存在者の概念は徹頭徹尾宇宙論的であるのに対し、「純粹理性の理想」のそれは「最高存在者という純粹な理念」⁴⁾に基づいた存在論的なものである。勿論周知の如く「純粹理性の理想」に於いても宇宙論的証明(の不可能性)は論ぜられてゐる。しかし「純粹理性の理想」に於いてカントが証示せんとしたのは、必然的存在者の宇宙論的証明が有する証明力は結局存在論的証明に由来するものだということであつた。宇宙論的証明は本来必然的存在者の全くア・プリオリな概念に基づいて構成されるものではなく、経験から出發するものであるから、本来存在論的であつてはならない。経験の対象の総体は「世界」であるが故に、これに基礎を置く証明は「宇宙論的」と呼ばれるのである。それにも拘わらず、絶対的必然性は純粹な概念に基づいて洞察されるが故に、経験は必然的存在者の概念に関して何も教示し得ないために、結局宇宙論的証明は必然的存在者の存在証明を行うに当たつて、最實在的存在者の概念から必然的存在者の概念へと推論する存在論的証明に頼らざるを得なくなるのである。宇宙論的論証が「隠された存在論的証明」(ein versteckter ontologischer Beweis)⁵⁾とされる所以である。

従つて、第四アンチノミーに於ける必然的存在者の概念と「純粹理

性の理想」に於けるそれとは、名前は同じであるがいわば出自が違うのである。超越論的弁証論という同一の領域に属するとは言え、世界理念に関わるアンチノミー論と、実在するものの汎通的规定 (die durchgängige Bestimmung) の根柢に存する「個物としての理念」⁽⁶⁾に関わる「純粹理性の理想」論とは考察の出発点に大きな隔たりがあるのであり、このことを看過するならば第四アンチノミーに於ける必然的存在者の概念と「純粹理性の理想」に於けるそれとの相違を把握することは不可能となるであらう。言うまでもなくカントはアンチノミー論を開始するにあたってこの隔たりを明確に提示している。

「現象の綜合に於ける絶対的総体性に関する限り、私はあらゆる超越論的理念を世界概念と名付ける。それはひとつには、それ自体ひとつの理念に過ぎない世界全体という概念も基づくところのこの無制約的総体性の故にであり、またひとつには、これらの超越論的理念は専ら諸現象の綜合に、従つて経験的綜合に関わるからである。これに対して絶対的総体性は、あらゆる可能的事物の諸制約を綜合する場合には、純粹理性の理想を惹起するであらう。これは世界概念に関連するにも拘わらず、それとは全く異なったものなのである」⁽⁷⁾。また暫くしてからこの差異に対して繰り返し注意を促している。「ここで注意されねばならないことは、絶対的総体性の理念が関わるのは諸現象の解明に他ならないのであつて、従つて諸事物一般という全体に関する純粹悟性概念には関与しないということである」⁽⁸⁾。

アンチノミー論の出発点は「現象の綜合に於ける絶対的総体性」であるのに対し、「純粹理性の理想」論のそれは「あらゆる可能的事物の諸制約」の綜合に於ける「絶対的総体性」なのである。経験の対象である現象の綜合に関わるアンチノミー論に於ける「世界概念」という理念は、まだなお経験の対象が有する、感覚に由来する「実在性」との微かな繋がりを維持しているが、純粹理性の理想は「全く経験の対象たりえないもの」⁽⁹⁾であるから、可能的経験の領域内にしかあり得ない「実在性」からは分離されてしまっているのである。「理念はカテゴリーよりも一層客観的実在性から遠ざかっている」⁽¹⁰⁾が、理想は「理念よりもなお一層客観的実在性から遠ざかっている」⁽¹¹⁾とされる所以である。「純粹理性の理想」論に於ける必然的存在者の概念は「物一般に関する純粹概念」⁽¹²⁾、若しくはその客観的実在性が証明され難い「純粹理性概念」に他ならないのであつて、そこでは経験の対象たりえない可想的存在者 (Noumenon) である必然的存在者に関する知識の妥当性が否定されることになる。自然神学的証明の根柢には宇宙論的証明が、また宇宙論的証明の根柢には存在論的証明が存するが故に、存在論的証明こそ伝統的形而上学に於いて考察されてきた神の存在証明の中で本来唯一の存在証明であり、仮に経験の及ばない対象に関しても知識が成立するならば、これのみが唯一可能な存在証明となるべきものであつた」⁽¹³⁾。アンチノミー論に於ける必然的存在者の概念は、人間の経験の対象である現象を被制約者として規定し、この被制約者の遡源的系列の総体を理性が把握せんとすることによって生ずるものである。「宇

「理論的理念」と呼ばれる所以である。カントはこのことを理性の原則と見做している。「もし被制約者が与えられているならば諸制約の総計も与えられている、従つて、それによつてのみ被制約者が可能であつたところの端的な無制約者も与えられている。」¹⁴ 世界は現象の総括であり、理性が現象の「系列の絶対的総体性」を探索する限りに於いて、理性は現象の系列の総合の「絶対的完全性」を目的とする。被制約者のみでは系列の総合は完成しない。これを完成させるためには、被制約者の存在の前提となる、被制約者を制約するものであるがそれ自体は制約されることのない「無制約者」が求められなければならないのである。この「無制約者」こそ「理性が究極目的としている」¹⁵ ところのものであつた。カントはこの「無制約者」を二種類に分けてゐる。即ち無制約者が系列全体である場合と系列の一部である場合である。これは極めて重要な区分であるので、ここに見て置こう。

「さてこの無制約者は専ら全系列に於いて存立するものとして、それ故その系列に於いてはあらゆる諸項が例外なく制約されてゐて諸項全体のみが端的に無制約的であるものとして——この場合には遡源 (Regressus) は無限であるが——考えられるか、或いは絶対無制約者は系列の一部に過ぎないのであつて、他の諸項がその下に從属しているが、しかしそれ自体は如何なる他の制約の下にもないものであるかの何れかである。第一の場合には、系列は限界のない(起始のない)より先なる部分への (a parte priori) 進行即ち無限となるが、それにも拘わらず全体が与えられている。しかし系列に

於ける遡源は決して完成されず、潜勢的 (potentialiter) にのみ無限的と名付けられる。第二の場合には系列の第一項が存在するが、それは経過した時間に関しては世界起始と、空間に関しては世界界と、部分に関しては、即ちその限界内に於いて与えられたひとつの全体に関しては、單純体と、原因に関しては絶対的自己活動(自由)¹⁶と、変化する物の現存在に関しては絶対的必然性と呼ばれる。」

理性は現象の絶対的総体性の統一を得るために無制約者を求めるが、無制約者が二様に考えられるため、アンチノミーを招来するのである。ここでは第四アンチノミーに絞つてこのことを確認してみよう。他のアンチノミーに関しても同じことが確認できるのは言うまでもないであろう。

二

第四アンチノミーの定立は「世界には、その部分としてか或いはその原因として、全くの必然的存在者であるところのものが属している」¹⁷ というものである。注意しなければならないのは「世界には (Zu der Welt)」という言葉である。定立に於いて考えられているのは世界にいわば内在する必然的存在者であつて、現象の総括である世界と関連を持たない世界外の超越的存在者ではないのである。

反定立に於いては世界外の必然的存在者の可能性も考察されているが、それとて「世界原因」として論ぜられているのであつて、世界との関連は決して見失われていない。アンチノミー論が「現象の絶

対的総体性」に関わるものである以上それは常に「世界」を議論の基盤としているのである。特に第四アンチノミーの定立では人間の感性の形式である「時間」が重要な役割を演じているので「世界の他に「感性界」という表現も頻出する。それでは第四アンチノミーの定立の証明は如何なるものであろうか。

「さて与えられている各々の被制約者はその現実存在に関して諸制約から、そのみが絶対必然的な全くの無制約者に至るまでの完全な系列を前提している。それ故もしある変化が絶対必然的な何ものかの帰結として現実存在するならば、そのものは現実存在しなければならない。しかしこの必然的なものは感性界に属する。何となれば、それが感性界の外にあると仮定するならば、世界変化の系列はその起始をこの必然的なものから導出するにも拘わらず、この必然的原因そのものは感性界に属さないことになるだろうからである。ところがこのことは不可能である。何故なら、ある時間系列の起始は時間上先行するものによつてのみ規定されうるので、諸変化の或る系列の起始の最高制約はこの系列が未だ存していなかった時間の中に現実存在しなければならないからである(というのは、起始はひとつの現存在であつて、起始するものが存していなかった時間がそれに先行しているのであるから)。それ故諸変化の必然的原因が持つ因果性は、従つて原因それ自体も時間に属する、従つて現象に属する(現象に於いては時間のみがその形式として可能なのである)。それだからこの原因はあらゆる諸現象の総括としての感性界から分離しては考えられない。それ故世界そのも

のには全く必然的な何ものかが含まれている(これが全世界系列そのものであるにせよその部分であるにせよ)。(括弧内カント)

ここでの主張の核心は、世界変化の系列の起始と共に時間が始まるのではなく、起始がひとつの現存在であるからにはやはりこの起始の前に時間が先行していなければならない、従つて時間が世界の形式である以上は起始の最高制約も時間の中に存しなければならぬ、即ちそれは世界に属していなければならないということである。要するにここでは必然的存在者は徹頭徹尾世界内在的に考察されているのである。勿論理性が現象に於ける被制約者乃至偶然的存在者の因果的系列の完結を目指して無制約者を求めるに際して、理性が取りうる二つの道の中のひとつが示されている訳だが、ここでは被制約者の最高制約である必然的存在者は飽くまでも人間の経験の対象である現象の範囲内での存在者なのである。哲学的に言えば、これは世界と必然的存在者たる神を明確に区分けしない汎神論的主張¹⁹であり、この点からしても「物一般という純粹概念」から出発する「純粹理性の理想」に於ける必然的存在者の概念とは大きな隔たりがあると言つてよいだろう。また第四アンチノミーに於ける必然的存在者の証明は「純粹宇宙論的証明(Der reine kosmologische Beweis)」ではない。定立に対する註でカントは言っている、「さて純粹宇宙論的証明は、必然的存在者を記述する際に、必然的存在者が世界それ自体であるかそれとも世界とは異なったものであるかを未決定のままにしておくより他にはないのである。何故なら、世界と異なったものを突き止めるには、もはや宇宙論的でしか現象の系列

中を進行する諸原則が要求せられるのではなく、偶然的存在者一般の概念（それらが専ら悟性の対象として考量される限り）及びそれらを純粹概念によつて必然的存在者と結合する原理が要求せられるからである。こうしたことは全て超越的（transzendente）哲学に属する事柄であつて、ここではまだその場所ではない⁽²⁰⁾と。勿論斯かる事柄が論ぜられるのは「超越論的理想」の章に於いてである。さて上述の如く第四アンチノミーに於いて必然的存在者は専ら世界内的に考察されていた。そのため、第四アンチノミーの定立で論ぜられている必然的存在者の存在証明は確かに「宇宙論的証明」ではあるが、その出発点が人間の経験の対象たる、時間をその形式とする現象であるが故に「純粹宇宙論的証明」とはならないのである。超越論的感性論の議論を引くまでもなく「純粹」とは経験的なものを一切混じえていないことの謂いであつた。更に注意しなければならぬのは第四アンチノミーが「偶然的存在者一般の概念」を基礎にしている議論ではないということである。このことが看過されるならば第四アンチノミーに於ける「宇宙論的証明」と「純粹理性の理想」に於けるそれとが混同されやすくなつてしまふだろう。今まで見てきたように両者を分け隔てる要点は幾つかあるが、この点も決して見失われてはならない点だと思われる。『純粹理性批判』の体系構成の礎石となつてゐるのは言うまでもなくカテゴリー表である。アンチノミー論もその例に洩れない。それ故第四アンチノミーはカテゴリー表の中の第四のもの、即ち様相のカテゴリーに基づくものである。然しながら様相のカテゴリーの中、「可能性、現実

性、必然性の概念は系列に導かない⁽²¹⁾」が故に、聊か恣意的であると思われるが、系列を構成する唯一のものとして偶然性のカテゴリーのみが残る。この規定を帯びてゐる被制約者が偶然的存在者とされ、その最高制約がもはや何ものにも制約されることのない「無制約者」即ち必然的存在者なのであつた。従つて「宇宙論的証明」は常に系列の連鎖を辿ることによつて行われるのであつて、系列に属さないものに跳び移ることはできない。系列の連鎖は現象の形式である時間の中で進展するから、最高制約と言へども時間の中に或いは時間系列上に位置せざるを得ないことになる。斯くして「必然的存在者は世界系列の最高の項と見做されなければならない⁽²²⁾」ことになる。世界系列が感性的な時間規定を帯びる以上、世界系列を構成する諸項は人間の経験の対象である現象でなければならない。感性論及び分析論の成果によれば経験の対象は主として感性の形式である時間・空間とカテゴリーによつて構成されるのであつた。分析論に於ける議論は本稿の目的ではないので省略するが、カテゴリーの純粹な使用は経験の対象の認識に寄与するところがない。カテゴリーは経験的に使用されることによつてのみその充分な役割を果たすのである。従つて第四アンチノミーの「宇宙論的証明」に於いて重要な役割を演じてゐる「偶然性」は「経験的偶然性」であつて、純粹なカテゴリーの項目である「偶然性」ではないのである。もしこの「偶然性」に基づいて必然的存在者の存在証明が行われるならば、それは「純粹理性の理想」に於ける宇宙論的証明に見られる「欺瞞的諸原則」（die tüglichen Grundsätze）の幾つかを共有して

しまう。⁽²³⁾それは帰するところ因果律の超越的使用ということなのだ
 が、先程の「超越的哲学」に属するとされた、純粋なカテゴリーの
 一項目たる「偶然性」に基づく「偶然的存在者一般の概念」から出
 発する「証明」はまさしくこのことを行うのである。そもそも宇宙
 論的証明は人間の経験の対象たる現象の系列の遡源によって行われ
 るものである以上、現象の系列及びその形式たる時間を離れること
 は原理的に不可能な筈である。カントはこれを明確に定式化してい
 る、「現象の系列と、因果律という経験の原則に従った、それに於
 ける遡源とを根柢に置いて、ひとたび証明を宇宙論的に始めるなら
 ば、以後それから逸脱して、一つの項として系列に属さないものへ
 移行することはできない。何となれば、或るものが制約として見な
 されるところの意味と、連続的進行に於いてこの最高制約に導くこ
 とになっていた系列に於ける制約に対する被制約者の関係がそれに
 於いて解せられるところの意味とは同一でなければならぬからであ
 る。さてこの関係が感性的でしかも経験的に悟性を用いることが
 できるものであるならば、最高制約或いは原因は感性的の法則に従っ
 てのみ、それ故時間系列に属するものとしてのみ遡源を終結させ得
 るのであり、しかも必然的存在者は世界系列の最高項と見做されな
 ければならないのである⁽²⁴⁾」と。ところが「超越的哲学」に属する
 「宇宙論的証明」は感性的の形式たる時間の制約を逸脱し、「可想
 的系列」へと飛躍する。現象の系列の遡源に於いては経験が終結す
 ることはない。従って「ここでは第一起始や最高項は見出されないが
 故に、人は突然に偶然性の経験的概念を去って純粋カテゴリーを

取ったのである。これは斯くして純粋可想的系列を惹起せしめたの
 であるが、この系列の完全性は端的に必然的な原因の現存に基づい
 ていた。この原因は感性的諸制約に結びついていなかったもので、今
 や自分の因果性を自ら起始する時間制約からもまた解放された。し
 かしこの手続きが全く不当なものであるということは、以下から推
 論できるのである。カテゴリーの純粋な意味に於いては、その矛盾
 対当が可能なものが偶然的なのである。さて経験的偶然性から彼の
 可想的偶然性へと推論することは全くできない。⁽²⁵⁾世界に於ける変化
 を考えてみた場合、或る状態の反対は同時に起こり得ない。例えば
 或る物体が運動しているのと同時にその物体が静止していることは
 あり得ない。従って世界の中に生ずる変化は、カテゴリーの純粋な
 意味に於ける「偶然性」を構成しないのである。変化は常に時間系
 列に従って生ずるのであり、或る時間に於ける或るものの状態と反
 対の状態が生ずるのは別の時間に於いてである。「或る時間⁽²⁶⁾に於け
 る運動と別の時間に於ける静止は矛盾対当の関係をなさぬ」所以
 である。斯くして現象の総体である世界から出発する限り、変化の
 持つ偶然性は経験的偶然性に留まるが故に、カテゴリーの純粋な意
 味に於ける「偶然性」に頼って可想的系列に飛躍することはできな
 い。況や可想的系列を起始する必然的存在者の存在を証明すること
 はできないのである。従って必然的存在者は現象の系列を起始する
 ものでしかあり得ないから、それは時間の中に存在していなければ
 ならない、即ち現象の系列に属していなければならないということ
 になる。

先にも少し触れたが、カントのこの議論は因果律の超越的使用の不可能性の洞察に支えられている。因果律がカテゴリーの一項である以上、分析論の成果に従ってそれは経験的認識以外には使用できない、使用するならば「仮象」に陥ってしまう。「必然的存在者」という一見超越的な概念が出現するにも拘わらず、第四アンチノミーの議論はカントの「超越論的哲学」の地盤を離れるものではない。第四アンチノミーの定立に於いて、超越論的理念たる現象の系列の絶対的総体性を探求する理性は「無制約者」の名の下に、被制約者である偶然的存在者全体の絶対的制約を「必然的存在者」に見出した。しかしこれは飽くまでも現象の絶対的総体性をひとつの統一体として把握せんとする理性の「統制的理念」であって、決してその現存を証示するものではなかったのである。

三

第四アンチノミーの反定立は、「世界の中でも世界の外でも何処でも、世界の原因として端的な必然的存在者が存在することはない」というものである。カントがここで挙げている論拠は大きく分けて三点ある。先ず第一に、もし世界の一部分か或いは世界自身が必然的存在者であるとするならば、原因のない絶対的な起始が存在することに成るが、世界が現象の総体である以上、その形式たる時間の制約を受けない因果系列は存在し得ない、従って世界原因としての必然的存在者を考える余地はないということ。第二に、系列そのものがあらゆる起始を有せず、あらゆる部分が偶然的で被制約的

であるにも拘わらず、系列全体として必然的で無制約的な場合も想定されるが、系列の一部分でも必然的でないならば、系列の若干量の現存在 (das Dasein einer Menge) も必然的ではあり得ないので、この想定は「自己矛盾」を犯すこと。第三に、必然的存在者が世界の外に存在すると仮定するならば、これは世界系列の最上項として後の系列を起始することになり、因果関係として考えられるからやはり時間に即ち世界に属することになる、従って世界の外に必然的存在者が存在することはあり得ないこと。

第四アンチノミーに限らずアンチノミー論の反定立は「無制約者」を系列の全体と見做すことによつて生ずるのであり、無制約者を目指す遡源が無限に進行するということが意味されている。従つて第四アンチノミーの反定立に於いては、現象の系列の最高項若しくは第一原因には決して辿り着けないことが主張される訳である。

とは言えカント自身が述べているように定立の論拠と反定立の論拠は略々同じである (上の第一及び第三の論拠を参照せよ)。「定立に於いて根源体 (Urwesen) の現存が推論されたのとまさしく同一の証明根拠から、反定立に於いてはその非存在が、しかも同じ明晰性を以て推論される。」²⁸⁾即ち経過した全時間はあらゆる制約の系列と無制約者を共に含むとも考えられるし、被制約者しか含まないとも考えられる。彼によれば定立は「諸制約の系列の絶対的総体性」をを目指すことによつて無制約者と必然的存在者を得るが、反定立はすべてのものの「偶然性」に着目することによつて無制約者と必然的存在者を解消させてしまう。時間系列に於いて制約者はそれが帯びる

「偶然性」という規定によって再び被制約者となるからである。カントは「一般的人間理性はその対象をふたつの異なった立場から考量することで自己矛盾に陥る場合が屢々ある」と弁解するのだが、第四アンチノミーを「見せかけのアンチノミー (die scheinbare Antinomie)」と言わざるを得なかった。「二つの相互に矛盾する命題が、観点が異なると同時に真たりうる」と言うのである。即ち必然的存在者はそれ自体不可能であるかもしれないが、しかしこの不可能性は「感性界に属するあらゆるものの一般的な偶然性と依存性からも……世界の外なる原因を根拠とする原理からも決して推論されない」と言うのである。要するに人間の経験の対象が現象である限り、これまでの議論に従って現象の「絶対的総体性」を目指す理性の企てはその完遂が原理的に不可能であるため、必然的存在者の存在を積極的に否定することができないのである。このことこそがカントによれば「信仰」の土塁を守る術であり、「無神論」に陥らない道であった。⁽³²⁾ 斯くして「必然的存在者」という宇宙論的理念は、人間の経験に基礎を置く「実在性」から遙かに隔たったところに置かれ、「統制的理念」つまり「規則にのみ役立つ理念」⁽³³⁾ に変ぜられたが、人間の経験の対象たりえないという意味でその存立の余地を残されることになったのである。ここに言う「規則」とは「理性の原則」のことであるが、これは「所与の現象の諸制約の系列に於いて、端的な無制約者のもとに留まるを許さない遡源を命ずる規則」⁽³⁴⁾ である。そしてまたそれは「客観が何であるかをではなくて、対象の完全な概念に到達するには経験的遡源は如何に行われねばならぬかを言い得

る」⁽³⁵⁾ ものである。カントはこれを「理性の統制的原理」とも呼ぶ。この原理は「我々に関して遡源に於いて生起すべきことを要請するが、あらゆる遡源に先立って客観に於いて与えられているものを予料 (anizipiert) することがない」⁽³⁶⁾ 原理であり、「最大限に可能的経験を進行させ、拡大する」⁽³⁷⁾ 原理であり、従って可能的経験に絶対的限界を認めない原理である。それは「感性界の概念をあらゆる可能的経験を越えて拡大する理性の構成的原理」⁽³⁸⁾ には決してなりえないものであった。それ故それは現象の絶対的総体性の統一を目指す理性が能う限り探求しうるものとして、経験の進行を導く手引きの意味を有しているが、その「客観的実在性」は経験しえないがしかし否定もしえないものとなるのである。つまり現象の絶対的総体性に決して至り着けない理性は「必然的存在者」の概念を「統制的理念」として肯定するが、被制約者の「偶然性」に着目し、無限の遡源を考えるならば世界の原因としての「必然的存在者」の概念は否定されることになるのである。カントは繰り返しこのふたつの立場の間には矛盾がないことを主張する、感性界の可想的原因の想定と現象の汎通的偶然性乃至無限の遡源とは両立可能である、と。それ故にこそ第四アンチノミーは定立・反定立共に真たりうる「見せかけのアンチノミー」なのであった。上に見た如くカントはその理由を理性の「二つの異なった立場」に求めた。このことは畢竟理性の二様の「使用」に帰着する。「理性は経験的使用に於いてその歩みを進め、超越論的使用に於いてその特別な歩みを進めるのである」⁽³⁹⁾ 斯くして理性は感性界と可想界という二つの方向に分裂し始

めるのである。

第四アンチノミーの定立・反定立に於いて探究せられた「無制約者」はいずれも現象の地盤を離れるものではなかった。しかし「それ自体に於いて全く根拠づけられておらず、常に制約されているもの、すなわち現象の現存は、あらゆる現象とは異なったもの、従ってこの偶然性が終息するところの可想の対象を探究するよう我々を促す」⁽⁴⁰⁾以上、理性が求める「無制約者」は感性界の内なる宇宙論的理念ではなく、感性界の外なる超越的理念となる。これは「可想の対象」であり、従ってこれを積極的に措定することはできないが、しかしその存在を否定もできないという意味で許容可能な概念である(上の議論との類似に注意せよ)。第四アンチノミーに於いて出現した「必然的存在者」の概念は斯くして今や感性界の外なる超越的概念として新たな観点の下に考察し直されなければならない。それは経験の対象たる現象との絆を断ち切れ、「それ自体必然的なものから、即ち事物一般の純粹概念から導出されねばならない」⁽⁴¹⁾のである。「超越論的理想」の章は「感性界の外に踏み出す第一歩」⁽⁴²⁾に他ならなかった。それは可想界の方向に赴く理性が必然的に取らねばならない進路でもあり、或る意味で『純粹理性批判』を二分する「第一歩」でもあったのである。「超越論的理想」の章に至るまで『純粹理性批判』の議論は主として真なる認識が成立する経験の領域の画定とそのア・プリオリな構造を廻るものであった。その領域の外では理性は不可避的に「仮象」に巻き込まれることになる。それを示さんとしたのが「超越論的弁証論」の中の「純粹理性の誤

謬推理」の章であり、また「純粹理性のアンチノミー」の章であった。しかしそこに於いても経験との繋がりは決して見失われてはいない。ところが「純粹理性の理想」の章に於いて初めて経験との連関が断ち切れ、新たな形而上学的考察の地平が開かれるが如き観が呈されるのである。勿論カントの結論は否定的なものであり、一般的にはカントはここで伝統的形而上学の無効を宣言したのだと理解されている。しかし果たしてそれだけで全ての問題が尽きるのかどうか——このことを次の考察の課題として取り上げることになしようと思う。

【註】

使用した『純粹理性批判』のテキストは Philosophische Bibliothek Bd.37a(Hrsg.v.Dr.Raymund Schmidt, Felix Meiner Verlag, Hamburg, Durchgeseher Nachdruck 1976) に拠った。引用箇所は通例に従い、第一版A、第二版Bの頁付けによってこれを示す。

引用文中の傍点は原典に於いてゲシュベルトで印刷されている箇所該当する。

- (1) 第四アンチノミーの形而上学的内容を簡便に知るには、Heinz Heinssoeth, *Metaphysische Gehalte in Kants vierer Antinomie*. In: *Studien zur Philosophie Immanuel Kants II*, Bonn 1970, SS.271-280. を参照せよ。
- (2) A456/B484
- (3) A457/B485
- (4) A456/B484
- (5) A457/B485
- (6) A629/B657
- (7) A407-408/B434-435
- (8) A416/B443

- (9) A566/B594
 (10) A567/B595
 (11) a.a.O.
 (12) A566/B594
 (13) Vgl. A630/B658
 (14) A409/B436
 (15) A417/B445
 (16) A417-418/B445-446
 (17) A452/B480
 (18) A452/B480, A454/B482
 (19) Vgl. Heinz Heimsoeth, *Transzendente Dialektik II*, Berlin 1967, S.253.
 (20) A456/B484 *transzendente* や *transzendente* となる Görland の校訂は
 底本文を誤り難ういふのである。
 (21) A415/B442
 (22) A458/B486
 (23) Vgl. A609-610/B637-638
 (24) A456/B484, A458/B486
 (25) A458/B486
 (26) A460/B488
 (27) A453/B481
 (28) A459/B487
 (29) A560/B588
 (30) a.a.O.
 (31) A562-563/B590-591
 (32) 屢々誤解される「信仰に場を得るために、知識を除去せねばならなかつた」(BXXX) というカントの有名な言葉の理解の前提は、必然的存在者を廻る彼の思考の理解なのである。
- (33) A509/B537
 (34) A508-509/B536-537
 (35) A510/B538
 (36) A509/B537
 (37) a.a.O.
 (38) a.a.O.
 (39) A563/B591
 (40) A566/B594

- (41) a.a.O.
 (42) a.a.O.

〈付記〉本稿は平成十年度工学院大学総合研究所一般研究費による研究成果の一部である。

(くさの あきら 本学共通課程助教授 哲学)